コラム

93

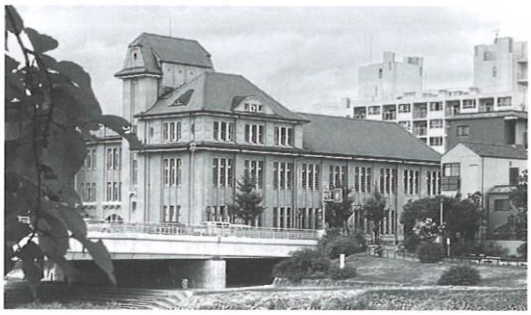
中嶋哲夫の「人事も歩けば」

建物のリユース

以前から気になっていた建物が，京都にあります。場所は，京都舎密（せいみ）局跡（市立銅駝（どうだ）美術工芸高校）の北隣。ドイツ風の石造りの建物です。加茂川の対岸から眺めると，シンメトリックなデザインが際立ちます。新しい劇場にも文化財にも見えます。舎密局と関連のある建物の可能性もあると，想像を膨らませていました。

京都舎密局は，明治維新直後に植村知事によって設立された理化学研究所です。戦禍と遷都で寂れた京都を，新しい技術で立て直す政策でした。明治３（1870）年から14（1881）年まで京都府が，その後は民間の力で明治中期まで維持されました。石鹸，染色，ビール醸造，硝子製造などの技術を研究し，教えたと聞きます。そこに出入りし，企業を興したのが島津源蔵。島津製作所の創業者です（息子の二代目源蔵が蓄電池の発明者。親子で京都の化学工業を発展させました）。

現地を訪ねると，筆者の想像はまったく的外れでした。まず，建物の１階はフレスコという地場のスーパー。２階はコナミのスポーツジム。建物は，大正13（1924）年に営業を開始した京都中央電話局上分局の庁舎です。昭和57（1982）年まで使用され，昭和59（1984）年には京都市の登録文化財になったと碑文に記されています。



▲旧京都中央電話局上分局

１階のフレスコに入ってみました。入口の天井はアーチ型。４段の石段を上ると，左右に商品が積まれ，その奥にガラス戸があります。右に曲がるとお酒とイートインのコーナー。左には食料品。顧客は，Ｕの字型に配置された売場を一まわりすれば買い物が済みます。狭い売場です。レジは２台，商品の種類も限られます。商品の搬入口が見当たらないので，作業動線も悪そうです。効率からみれば，商売がしにくいと思える店舗です。

弁当を購入し，イートインで食べながら妄想を膨らませました。フレスコは京都の地場スーパーの名前。母体の会社名はハートフレンド。その起こりは，公設小売市場の空き店舗対策として組合員全員が出資をした会社です。初期には倒産寸前の苦労をしたとのことですが，現在では100店舗を数え，他県にも進出しています。そんな出自だから，地元との持ちつ持たれつの関係を強く意識しているのでしょう。地元の文化財をリユースして，そこで買物する人々に寄り添う。そんなイメージが思い浮かびました。

（MBO 実践支援センター代表）